

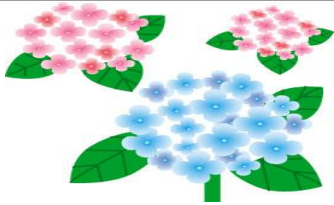


学校だより

6月号

令和3年5月31日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「カタツムリ」

学校長 後藤 直樹

先月の朝会で「生き物」の話をしました。飼い始めてから30年近くになるハコガメの話や、小学生の頃飼っていたシマリスの話に低学年の子どもたちの目がいつになく輝いているのが、朝礼台の上からでも感じられました。その日以来、子どもたちとの距離が少し近くなったように感じます。

そんなある日の朝、見守り隊の北見さんと学校前の横断歩道に立っていると、一人の男の子が駆け寄ってきました。その手のひらには小さなカタツムリと何匹かのナメクジと一緒に乗っていました。私は思わず「ナメクジはカタツムリの殻が無くなった進化系だから親戚なんだよ!」と、とっさに頭に浮かんだ豆知識を口にしていました。その時、指の隙間からナメクジがぼろっと下に落ちてしまいました。その子は砂だらけのナメクジを大切に拾い上げ、校門に向かっていきました。私は後でこんなことを思いました。私たち大人の概念では、カタツムリは身近にいる可愛い生き物であり、童謡にもなっています。しかしナメクジはというと、その真逆で、塩をかけて退治されてきた生き物です。でもよくよく考えてみると、とっさに子どもに話した通り、ごく近い生き物同士で、どちらもさほど人間に有害というわけでもありません。知らぬ間に当たり前の事として、見た目だけで差別してきた自分がいることに気付かされました。無垢な気持ちで、まったく同じように扱っている子どもの姿を見た時、「もしかしたら学校の教育が、子どもたちの頭の中に固定の概念だけを押し付けたり、刷り込んだりすることになってはしないだろうか?」考え方や常識を教えているつもりが、実は子どもの視野を狭くしていることもあるかもしれない。だとすれば、私たちは子どもたちの思いや考えをより丁寧に聞くことを忘れてはいけないな。ふと、そんなことを考えさせられました。

きっと未来の年表にも記されることになるだろうコロナ禍での生活は、今しばらく続きそうですが、一人ひとりの子どもたちの思いや考えを大切にしながら、乗り切っていきたいと思います。



休み時間は 虫探しに夢中